
ほんわかダークちょっと不思議の小話集

いーぺい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほんわかダークちよつと不思議の小話集

【Nコード】

N5359F

【作者名】

いーぺい

【あらすじ】

ほんわかしたものの、ダークなもの、不思議なものなどを思いついたままにつづったまとめ帳。一話完結型になります。

00 あと少し

朝の目覚めは憂鬱な一日が始まる合図。

学校についてからは一言もしゃべらない。

一人で過ごす嫌な時間

哀れられるのはキライ、見下されているようでイヤ

終了のチャイムと同時に帰る。

迷いなどない。

私を憂鬱にする人たちと同じ交通機関に乗りたくない

こちらをチラチラとみながら笑っている会話

虫唾が走る。

一発殴ってしまいたい。それで解決などできないが。

そう心を鈍感にしまえばいい。

何も感じない。

これでいい

私は誰にも屈さない。

今日も一日が終わる あと52日

三学期は、始まったばかりだ。

単調すぎる毎日

こんなときに想うのは

シニタイ

それだけ

私なんて存在がなくなればいい。

こんな憂鬱な心をかかえているよりは楽だ。

そう思えてしまう。

静かな校舎、誰もいない教室、外からの夕焼けは綺麗で引かれる。

手首を切つてしまおうか
筆箱の中には常にカッターがある
刃物を出す動作
出すときの音
どれも魅力的なものにうつる。
反射して光はものコレだけではない。
全てを終わらせたい。

01 気づいてよ

何がすき？

桃

昨日は犬って言ってなかった？

私の好みは日々変わるの！！

男の好みも？

にっこりと彼は笑った。

思い出すだけでも恥ずかしいやらむかつくやらで嫌な思い出に決定。

いっておくが私は一途なのだ。ころころと惚れっばいわけじゃない。

私の唯一の男友達は人をくったような性格をしている。

なぜ友達付き合いをしているか疑問だ。

私は一途なんだよ。

本当だつてば。

だつてだつて！

また笑った、私のこと馬鹿にしてんの？

いや、可愛いなって思っ

なっなにいつてんの！そうやって私のこといじめてんでしょ！

顔が赤いくなっていくのは気のせいである。

断固として認めないんだから。

嬉しいなんて思っ

本当に思っ

そう私はクールガールなんだから。

じゃ、私もう帰るから。

あ、そうなの。せっかくお手製の甘いケーキ作っ

ケーキなの！さっきから気になっていた箱にはケーキが入ってるの
ね？！

しかもお手製。

違う、私はクールなガールなのよ。ケーキごときで、ましてやお手
製ごときで心が揺れたりしないわ。

ちよつと箱を振っちゃだめよ。

中身が崩れちゃうじゃないの。

ほかの女の子に上げちゃおうかな

何にやにやしなから笑ってんの！あげたきゃあげればいいじゃないの。

そんな箱に未練なんてない。

本当に？

……。

もう馬鹿ー！！

思いつきり叫んでやったわね。

思いつきり逃げてきちゃったわ、箱を奪ってから。

明日から顔合わせられない！どうしてくれんのよー！！

02 ご命令を

知り合いからAIつきのロボットを預けられた。
実生活での性能テストをしてほしいとのことだ。

私がリストラにあい、妻に逃げられてやさぐれていたからか「暇つぶしになるだろ」とか押しつけられたようなものだ。

あいつには会いたくなかったのに。
恥を知れってんだ。

「ご主人様、ご命令を」

合成音声なのにすべらかだ。技術の進歩は目を見張るものがある。
かといってやってもらうことはない、自分の世話くらい自分でできるから。

基本原則ぐらいいは私だって知っている。だから確かに暇つぶしでそんな命令をしてしまったのだ。

「なら、私のことを殺してくれよ」

拒否されると信じていた。

「畏まりました」

だから、返答に困惑した。了承するはずがない命令。

犯罪を犯すべからず

基本原則を無視しているのだ。それかもととプログラムされていないのか。

ロボットは包丁を取り出すとためらいもなく近づいてきた。

「ちょ、まて！やめろっ命令だっ」

慌てて取り消しの命令をする。

「畏まりました」

そう了承しているのになおも近づいてくる。

そこで私は理解した。こいつは一命令ずつしか実行できないのだ。
命令を実行終了しないと次の命令を実行できないのだ。

技術は私が思っていたよりも進歩していなかったようである。

ああ、やっぱりあいつは恥を知ったほうがいい。

私の妻を奪ったうえに私にこんな少女型のロボットを送り込んできたんだから。

あいつこそ死ねばいいのに。

だから最後に命令を。

「私の妻だった女と、その夫を殺してくれ」

「畏まりました」

03 求めるもの

きれい、きれい、きれい、

人間なんてきれい。

この地球上からなくなってしまえばいいのに。

消えてしまえばいいのに。

細胞すら残らず消滅してしまえばいいのに。

生きることは幸せだと、幸福だと、いうひとがいるけれども

本当に幸せ？

本当に幸福？

わたしにとっては幸せじゃない、幸福じゃない。

もっともっと何かを求めている。

そんなものではない。

そんな言葉なんて知らない。

- わたしを満たしてくれるものだけを求めている。
-

・ ・ ・ ・ ・

「ねえ神様」

僕は甘えたように神様のひざに手を置いて神様の顔を覗き込んだ。

「なんだい？」

そこには誰よりも優しさあふれる瞳を持つ神様が僕をじっと見つめている。

「どうして僕はみんなと同じところに行かなくていいの？」

神様は安心したように幸せいっぱいだという顔をしたけれども少しさびしそうでもあった。

「みんなのところに行きたいのかい？」

「ううん、神様と一緒にいたいよ」

それを聞いた神様は僕を抱き上げて優しく背中を撫でてくれた。

「それならこのままでいようね」

聞こえる声は限りなく慈愛を含ませているけれども抱きしめてくれる腕は簡単に僕を放してしまえる。

「神様、大好き」

僕は甘えるように神様に抱きついた。

足りない、足りない、足りないよ。

神様。

どうして僕はみんなと同じところに行けないの？

満たしてくれないのなら、放して。

僕をみんなのところに放してしまつて。

04 閉鎖感

クラスの人たちが笑い合っている。

私の存在がみえないように笑い合っている。

だからか。

閉じ込められた。

男が3人出入りするだけの光も届かない部屋。

箱といったほうが正しい。

何もないのだから。

二年間閉じ込められた。

助け出されたときには同じクラスで笑いあっていた人たちの卒業の日。

そこは学校。

私をみて困惑する人たち。

そして笑う人たち。

卒業式を見ながらも私は吐きつづける。

のどを伝う何かの物質。

吐いても吐いても物質が除かれることがない。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

幼い頃からの師はそばで私を眺め続けるだけ。

何もしてくれない、ただ私を眺め続けるだけ。

声すら掛けてくれず。

私の先には何も無い。

目の前にあるのはバケツと白い机と椅子だけ。

カーテンの向こうには笑いながら卒業していく人たち。

同じに閉じ込められた子はいつのまにかいなくなっていた。

会いに行こう。

あの子なら私を解ってくれる。
いない。

家にも庭にも小屋にもいない。

あの子はどこかにいってしまったんだと知った。
望んで閉じ込められていたんだ。

だから、どこかに行ってしまった。

最後まであの子が女の子かどうか分からなかった。
戻ろう。

どこへ。

私の前にあるのは真っ白な空間だけ。

何もない。

後ろを見ても何もない。

学校も、あの子も、家も何もない。

私にまわりつく空気だけが停滞し続けている。
これだけが私を受け入れてくれる。

05 囚われる場所

まっくら闇。

霧がたちこめている。

私は壁に寄りかかり片膝をたて、そこに腕と頭をのせて霧を眺めていた。

すぐそばのもののすら認識はできない。

認識できるのは頭に巻きつけているだけの布が温かいことだけ。背中を預けている壁が冷たいことだけ。

短い髪の色も手の色も着ているぼろの服の色もわからない。

ただ暗い色であるだけだ。

霧を眺めることだけの意識しか残っていない。

ひかり。

光。

ヒカリ。

上空に窓があるのか。

差し込まれる光が私の横を通り霧しかないここを照らしている。

私の視線はまっすぐに動かないけれども明るくなったここに嬉しさがわずかに沸き起こる。

明るくなったこのさきにはサクがある。

みえないけれども上から下までをサクで区切られているのかもしれないけれども。

私には関係ないことだ。

初めて霧以外のものが見えた。

暗い色の向こうからは手が差し込まれ私を誘っているかのように手を上下に動かしている。

ゆるかな動きをしている。

だが腕から手先しかみえず、その先は暗闇。

誰が私を呼んでいるのかもわからない。

けれども私にはどうでもいいことだ。

今、ここには光が差し込まれているのだから、
明るい色の。

暗い色以外の色を始めて目にしたのだから、
すべてどうでもいいことだ。

ここがどこなのかも。

よんでいるのがだれなのかも。

私になにものかも。

私には霧が見えて光が見えて、それで満足なのだ。
ずっとここに留まり続けたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5359f/>

ほんわかダークちょっと不思議の小話集

2010年10月10日03時44分発行